

里山の野生哺乳類の見分け方

山道で出会った野生動物、こいつは何者？

(公財) 科学教育研究会 研究員

森 弘 安

近年、タヌキやアナグマが市街地に出てきたり、外来生物のアライグマやハクビシンが天井裏に住みつくなど、野生動物との出会いが、丘陵地や緑地に近い市街地で増えている。スギ・ヒノキの植林地や里山の雑木林が放置され、野生動物の生活の場が市街地にまで及んできた事態と考えられる。

筆者は、東京都あきる野市で、熱センサーカメラ（自動カメラ）を山地、丘陵地や河川敷など様々な場所に設置して、野生動物を撮影し、多くの種の生息を確認してきた。野生動物の行動は夜間が多いので、自動カメラで撮影された映像は多くの場合暗い。また、動物の体の一部や遠く小さい姿の映像の場合もあり、その中に種の特徴をみつけ、種の同定を行ってきた。

(1) タヌキとアライグマ

30年位前、日本の各地で野生化したアライグマが発見された時、度々タヌキと間違えられ

写真① タヌキ



写真② アライグマ



た。タヌキとアライグマの大きさは、同じ位であるが、写真①と②とを見比べると、大きく異なる特徴は、尾にあることが分かる。

写真③

タヌキの尾



写真④

アライグマの尾



写真③と④のように、タヌキの尾は、一般に、ふさふさした毛で覆われ、頭胴の約四分の一の長さで、尾先が黒い。一方、アライグマの尾には、黒い輪模様が数個あり、尾の長さが頭胴の長さの約二分の一もあって、太くて長い。

尾を見れば、一目で区別できるが、真正面から向き合った時は尾が見えず、顔を見ることに

写真⑤
タヌキの顔



写真⑥
アライグマの顔



なる。タヌキの顔は、写真⑤のように、目のまわりの毛が黒く、パンダ模様になっていて、両目の間の鼻筋が白っぽい毛でくっきりみえる。アライグマの顔も、写真⑥のように、やはり目のまわりの毛が黒いが、眼と眼の間の毛も黒く、両目の周りの黒毛が鼻の上でつながっている。

(2) アナグマとハクビシン

里山の動物アナグマは、昔からタヌキとよく

写真⑦ アナグマ



写真⑧ ハクビシン



混同され、どちらもムジナと呼ばれたり、「同じ穴のムジナ」などの諺も生まれたが、最近では外来生物のハクビシンとよく間違われる。

アナグマとハクビシンの体の大きさは、ほぼ同じくらいであるが、アナグマはずんぐり、ハクビシンはスリムな体つきをしている。写真⑦と⑧を見比べると、お互いによく似ている特徴は、鼻筋の白毛である。アナグマの白い鼻筋を見てハクビシンと間違える人がいる。

写真⑨
アナグマの顔



写真⑩
ハクビシンの顔



アナグマの鼻筋は、写真⑨のように、両眼を取り囲む黒褐色の部分の間を仕切る顔の地色の部分であるが、ハクビシンの鼻筋の白毛は、写真⑩のように、顔面全体の黒褐色の地色の中に、くっきり白線を引いたように見える。

写真⑪
アナグマの尾



写真⑫
ハクビシンの尾



アナグマとハクビシンの外観で、大きく異なる特徴は、写真⑪と⑫のように、尾の長さであ

る。アナグマの尾は、頭胴の約四分の一の長さで短く、背側と同じような長めの毛でおおわれている。ハクビシンの尾は、頭胴の約四分の三もの長さがあり、長くて太い。

(3) キツネとタヌキ

写真⑬ キツネ



写真⑬のキツネは、タヌキと並んで里山の代表的な動物である。昔から化かし合う悪賢い者どうしに例えられたが、人の日常生活の近くに生息して親しまれてきた動物たちである。

タヌキが丘陵地の周辺などでの自動カメラによる撮影が多いのに対して、キツネは山地や丘陵地の尾根道での撮影が多い。しかし、河川敷や台地、丘陵地周辺の畑地に、キツネ独特の一直線の足跡がよく見られるので、タヌキよりは

写真⑭ キツネの歩行と足跡

(肩幅が狭いキツネの歩行) (一直線のキツネの足跡)



広い地域を行動範囲にしていると思われる。

写真⑭のように、キツネは肩幅が狭いため左右の足をほぼ一直線上におき、前足跡に後足を重ねるので、足跡はほぼ一直線になる。タヌキの足跡は、イヌと同じように、左右の足跡が離れて一直線にはならない。

写真⑮ キツネの尾



写真⑯ タヌキの尾



キツネの体は、タヌキよりも約20%は大きく、尾も頭胴の二分の一以上の長さがあり、写真⑯のように長く大きくふさふさしている。大きな尾がキツネを見分けるわかりやすい特徴である。

写真⑰ キツネの顔



写真⑱ タヌキの顔



タヌキの毛色が、白毛が混ざった黒っぽい褐色なのに対して、キツネの毛色は明るい赤褐色の、いわゆるキツネ色である。印刷が単色のために写真で毛色の違いを示せないが、体の毛色も種類を判別する大きな特徴である。

キツネの顔は、写真⑰のように、口先(吻部)

が写真⑱のタヌキよりも細く尖っているために、顔全体が細長く見える。夕方などの色がわかりにくい時に、また、不意の出会いで顔しかよく見られなかった時の見分ける特徴である。

(4) イタチとテン

写真⑱ イタチ



写真⑳ テン



イタチとテンは、写真⑱と⑳のように類似点が多く、撮影画像をみても、区別に戸惑うことがある。一般に、イタチは、河川や水田など水辺の周辺で撮影されるが、テンは、樹上生活ができる森林地域で撮影されることが多い。

しかし、多摩川支流の秋川では、イタチが住む河川敷とテンが住む崖線樹林とが接している、同じ自動カメラにイタチもテンも撮影される。

また、水田と雑木林が接している里山でも、やはり、同じ自動カメラにイタチもテンも撮影

され、撮影場所では区別ができない。

写真⑱のイタチと、写真⑳のテンとを見比べて、外形の違う特徴を指摘できるだろうか。よく見ると、耳（耳介）の大きさが違うのである。

写真㉑ イタチとテンの耳介

(イタチの埋まる耳) (テンの突出する耳)



写真㉑のように、イタチの耳介は小さく、毛並みの中に埋まっているが、テンの耳介はやや大きく、毛並みの上に突出している。この耳介の大きさや形の違いが、イタチとテンを見分ける有力な特徴である。

写真㉒ イタチの尾



写真 ㉓テンの尾



写真㉔ 冬毛のテン



写真㉕ 夏毛のテン



尾の特徴で、すべてのイタチとテンを見分けることは困難だが、テンは、尾の先端部が白毛になっている個体が多いので、逆に、尾の先端部が白毛の個体はテンと見分けられる。

テンには、冬になると全身黄色で、顔と尾先が白色の冬毛になる個体（写真⑳と㉑）と、冬になっても、全身茶色で顔と四肢が黒く、尾先だけが白い夏毛とあまり変わらない個体（写真㉒）がいて、毛色の変異が大きい。

イタチとテンは、体の大きさが違う。イタチの♂は、頭胴長が約35 cm あるが、テンの♂はイタチより10 cm 以上長く、大きい。

テンの♀は♂よりやや小型だが、イタチの♀は、♂の半分近くの大きさしかない。しかし、出会った動物の体の大きさだけで、イタチとテンの区別をするのは困難である。

(5) カモシカとニホンジカ

特別天然記念物に指定されているカモシカは、東京では、かつては奥多摩の山深くに生息していたはずだが、今では、人里近くに出現するようになった。

写真㉓ カモシカ



写真㉓のカモシカは、2016年5月に秋川丘陵で撮影された。昨年、JR武蔵五日市駅の北

800 m付近の人家近くでも撮影され、今では里山の哺乳類の仲間入りをしたように思われる。

写真㉔ ニホンジカ（冬毛、4歳以上、♂）



写真㉔は、2016年3月に秋川丘陵で撮影したニホンジカである。冬毛のために体毛は灰褐色をしていて、夏毛に見られる霜降り模様の白斑はない。

ニホンジカについても、全国的な分布拡大が進行している中で、秋川丘陵も例外ではなく、自動カメラでよく撮影されるようになった。

写真㉕ ニホンジカの角

♂個体、角あり

♀個体、角なし



ニホンジカには、写真㉔と㉕のように♂だけに角があり毎年生え換わる。♀に角はない。

ニホンジカの角は、毎年3月に落ちて夏までに新しい角に生え換わる。写真㉕のように、角に枝分れがない個体は1歳の♂である。生え換わる年ごとに枝分れが1つずつ増えていく。

写真⑳の個体のように、角の枝分かれが3つの4歳になると、それ以降は年ごとに生え換わっても角の枝分かれの数は増えない。

写真㉑ カモシカの角



一方、カモシカには、♂♀ともに角がある。写真㉑のように、角は小さく細長く先が尖り、後方に曲っている。生え換わらず、加齢とともに角の基部にある輪状の隆起の数が増える。

写真㉒ 後方から見た特徴

カモシカの後姿

ニホンジカの後姿



カモシカの尾は短く、後方から見て顕著な特徴はない。一方、ニホンジカでは、尻の大きな白斑が目立ち、山道で出会った時など、逃げ去るニホンジカの尻の白斑が、波のように上下して遠ざかる様子が見られる。

写真㉑のカモシカの子は金比羅尾根で、ニホンジカの子は秋川丘陵で撮影され、それぞれ繁殖が行われる生息地と思われる。

ニホンジカの子の毛色は茶褐色に白斑が散在

写真㉓ 幼獣の姿

カモシカの子

ニホンジカの子



する模様をしていて、成体の夏毛に似ている。

カモシカは群れをつくらず、なわばりをつくり、生息密度が低いので、植生に与える影響は少ない。一方、ニホンジカは群れをつくり、個体数が増加しやすく、好きな植物種を集中的に食べるので、好餌の植生を絶滅させ、地域の生態系を変質させる危惧がある。

(6) イノシシ

写真㉔ イノシシ ^{たてがみ} (鬃がある♂個体)



写真㉕

イノシシの顔

写真㉖

疥癬の個体



イノシシは、全身が褐色または暗灰色で長さ8 mm 前後の剛毛でおおわれている。毛色に変異が多い。写真⑳では、頭頂から背にかけて長さ10数 cm の長毛があり、たてがみになっている。

写真㉓のように、口先（吻）は長く、先は円盤状でそこに鼻孔が開く。吻で土砂を掘り返し、植物の根茎やミミズなどの動物を食べる。農地、芝地、草地、丘陵の道までイノシシに掘り返されている。現在、丘陵の周辺では、電気柵で畑地を囲わないと家庭菜園も成立しないほど農業被害が多く、自動カメラでよく撮影される。

最近では疥癬に罹患した個体が増え、毛が抜けて皮膚の一部が露出し、写真㉔のようにまだら模様になった個体が撮影される。

写真㉕ イノシシ（育児中の♀個体）



写真㉕は、乳房の大きい♀親を2014年10月に秋川丘陵で撮影したものである。連続の写真では子どもも写っていて育児中と思われる。

写真㉖のように瓜のような縞模様のある子（瓜坊）の群が初夏と秋によく撮影される。この写真では9頭の子が数えられる。イノシシの産子数は4～5頭、ブタとの交雑種イノブタは10頭前後という。この地のイノシシには交雑

写真㉖ イノシシの子どもたち（瓜坊）



写真㉗ 成長したイノシシの子どもたち



によるブタの遺伝子の混入が推測される。

写真㉘は、生後ほぼ半年の子どもたちで、母親との群れ生活を続けている。一般に、♂は1～2歳で独立し、♀は母親との群れ生活を続けるといわれているが、群れの構造の推移について、この地で調査は行われていない。

参考文献

- (1) 日本の哺乳類（改訂版）阿部 永（監修）
2005年 東海大学出版会
- (2) あきる野市 自然環境調査報告書
平成25年 あきる野市発行